

平成三十一年度

前期日程

国語問題 (H・F・J・E)

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計六か所)に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十六ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用紙は三枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子は持ち帰ること。

I

次の文章は、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』を素材として、著者が言語について考察したものである。これを読み、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

今、人類の多くは、自分たちの(国語)を、おのが民族が、太古の昔から使ってきた言葉だと思いこむにいたっている。ところが、『想像の共同体』によれば、(国語)とは、いくつかの歴史的條件が重なって生まれたものでしかない。

(国語)の成立にかんしての、アンダーソンの歴史的な分析が画期的なのは、資本主義の発達という、下部構造のヴェクトルを入れたことにある。ご存じのように、十五世紀半ば、ヨーロッパで、グーテンベルク印刷機が発明され、今まで手で写していた書物が機械で印刷できるようになった。グーテンベルク印刷機の発明が人類の(書き言葉)の歴史のなかでいかに大きな意味をもつに至ったかは周知の事実である。だが、アンダーソンいわく、たとえ、グーテンベルク印刷機が発明され、書物が機械で印刷できるようになっても、その印刷された書物が商品となって流通しなくては、印刷機の発明が社会を大きく変えることとはない。(実際、活版印刷機そのものは、グーテンベルク印刷機よりもまえに中国や朝鮮で発明されている。)アンダーソンによれば、グーテンベルク印刷機の発明がのちの(国語)の成立に意味をもったのは、そのときヨーロッパでは資本主義がすでに十分に発達しており、書物が商品として市場で流通する下地ができていたからだという。書物が商品として市場で流通することによって、市場原理が働き、それが最終的には(国語)の成立を可能にしていたのであった。

グーテンベルク印刷機が発明される前、ヨーロッパの書物のほとんどは、僧侶がペンを使い、一語、一語、羊皮紙に写しとる、聖典や教義書でしかなかった。そして、それらは、当時ほぼ唯一の(書き言葉)であったラテン語で書かれたものであった。ラテン語とは何か。アンダーソンは言う。「ラテン語について決定的なことは、その神聖性を別とすれば、それが二つの言語を使う人々の言葉だったということにある」。すなわちラテン語とは、巷では(自分たちの言葉)で話しつつ、書物の紐をといったときは、(外の言葉)で読み書きする、二重言語者の言葉であった。そして、それらの二重言語者は、極めて限られた数しかいなかった。ラテン語という「聖なる文字を読むことのできた文人は、広大な文盲者の大海に頭を出した小さな識字者の

岩礁でしかなかった。だが、一語、一語、そのラテン語を羊皮紙に写しとるので、そのような極めて限られた数の二重言語者にさえ潤沢に行き渡るだけの書物も作れない。そこへ、グーテンベルク印刷機の発明とともに、のちに「グーテンベルク聖書」ともばれるようになったラテン語の聖書がまずは印刷され、「最初の近代的大量生産工業商品」として市場に出回るようになったのである。大量生産工業商品とはものの言いようで、実際は美術品のように、贅沢な本である。だが、そのような贅沢な本でも、それが商品として市場に出れば、それを買って読みたいという二重言語者の読者、すなわち消費者がすでに存在していたということであり、経済学者のような言い方をすれば、すでに供給に見合うだけの需要があったのであった。

〈俗語革命〉——のちに〈国語〉を可能にした〈俗語革命〉は、アンダーソンによれば、需要と供給という同じ市場原理によって、その次の段階に、おこるべくしておこった。

「グーテンベルク聖書」に続き、まずはさまざまな本がラテン語で出版されるようになる。ところが、ラテン語を読めるのは「広汎に存在してはいても薄い層に限られて」いる。したがって、ラテン語を読む読者たちの市場はじきに飽和してしまう。新たな市場を開発するために、人々が巷で話す〈自分たちの言葉〉で書かれた本が、まさに市場原理によって、出回るようになる必然性があったのである。「資本主義の論理からすれば、エリートの人々のラテン語市場がひとたび飽和してしまえば、一言語だけを話す大衆の提示する巨大な潜在市場が手招きすることになる」。かくして〈俗語革命〉が起こる。ヨーロッパのさまざまな地域の〈話し言葉〉が、時間の差こそあれ、続々と〈書き言葉〉に生まれ変わって印刷され、出版されるようになったのである。アンダーソンの表現を使えば、さまざまな「口語俗語」(vernaculars)が、「出版語」(print languages)となったのである。最初に流通したのは、ラテン語から「口語俗語」への翻訳本である。だが、やがて「口語俗語」で直接書かれた本も流通するようになる。

「出版語」とは、〈書き言葉〉に昇格した、「口語俗語」を指す概念である。^(E)「出版語」は、社会的な地位からいえば、ラテン語の下にくるが、〈話し言葉〉でしかない「口語俗語」よりは上にくる。人々が巷で使っている「口語俗語」は、地域別、階級別に数限りなくある。方言が数限りなくあるようなものである。それに対して「出版語」は自然に数が限られてこざるをえない。本が

「大量生産工業商品」として利潤を生むためには、ある程度の規模をもって出版されなくてはならず、そのためには、「出版語」の数が制限されていかねばならないからである。かくして〈俗語革命〉を経たあと、ヨーロッパ全土で数限りなくあつた「口語俗語」が、英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、チェコ語、デンマーク語、ロシア語など、いくつかの重要な「出版語」に、あるところでは早く、あるところでは遅く、それぞればらばらに時間をかけながら吸収されていった。そして、それらの「出版語」を、ヨーロッパで地域別に何百万という人間が共有するうちに、アンダーソンが「想像の共同体」とよぶ、〈国民国家〉の基礎ができていったのであつた。

〈俗語革命〉から十八世紀、遅いところでは十九世紀、二十世紀初頭にかけてヨーロッパが辿つた道のは、さまざまな「出版語」が、〈国民国家〉の言葉として次第に固定されていった道のである。それは、印刷技術の発明と資本主義の発達、それに、アンダーソンが言う、「人間の言語的多様性」という宿命性^①とが加わって、ヨーロッパが必然的に辿つたであろう道のものであり、多分に無自覚なものであつた。だが、さまざまな「出版語」が〈国民国家〉の言葉として固定されていくうちに、人間には、同じ言葉を共有する人たちとは同じ共同体に属する、という思いが生まれてくる。同じ「想像の共同体」に属するという思いが生まれてくる。すると、ナショナリズムが芽生えてくる。じきにそのナショナリズムは、隣国との戦争を重ねるうちに形成されつつあつた〈国民国家〉によって、自覚的に利用されるものとなる。〈国民国家〉が誕生してからヨーロッパが辿つた道のは、植民地の取り合い、独立戦争、国境争いなどの世界戦争をくり返しながら、ナショナリズムが〈国民国家〉によって、自覚的に利用されていった道のものであつた。また、その時代は、ヨーロッパで誕生した〈国民国家〉というものが一つの規範となり(アンダーソンの表現によれば、「モジュール」となり)、ナショナリズムとともに、世界中に広がっていった時代でもあつた。

〔中略〕

このナショナリズムを育むのに大きく貢献したのが、新聞などの出版物であり、さらには、ほかならぬ^② ① である。① は、② という均質な空間に同時に生きる「国民」というものを想像させ、その「国民」に対して同胞

愛をもつのを可能にする。そして、そのような(国民文学)をそもそも可能にしたのが(②)『出版語』が(③)の言葉に転じたときに生まれるものだが、一度生まれてしまえば、「国民」がもつ国民性の本質的な表れたとされるようになる。

〔中略〕

不思議なことがある。ここまで影響力をもった本、しかも(国語)にかんして広く深く述べている本に、もはや、(国語)という概念では片づけられなくなった英語、それゆえに、すべての(国語)に何らかの形で影響を与えずにはいられなくなった英語、すなわち、すべての(国語)を越える(普遍語)としての英語……その英語にかんする考察が、まったく欠落しているという点である。『想像の共同体』で英語という言葉はあまたある(国語)の一つとしてしか出てこない。それはもつとも力をもった(国語)ではあっても、プリムス・インテル・パレス(primus inter pares)、すなわち、同じレベルに並んだもののなかの一番でしかない。アンダーソンには、英語がふつうの(国語)とはまったく別のレベルで機能する言葉となりつつあるという現実には、まるで見えていないのである。

〔中略〕

なぜ、アンダーソンには、英語がほかの(国語)とはちがうということが見えなかったのか。それは、何よりもまず、かれが英語を(母語)とする人間だからだとしか考えられない。アンダーソンは、一九三六年に中国の昆明に生まれるという変わった経歴をもち、いくつもの言語を使いこなす多重言語者だが、基本的には英語を(母語)とする人間である。ものを書くときは、当然、英語で書く。英語を(母語)とする人間は、自分が(母語)で書いているとき、実は自分が(普遍語)でも書いていることに、しばしば気がつかないものである。幸せな人間には、自分の幸福の条件はなかなか見えてこないのと同じである。『想像の共同体』があそこまでの影響力をもちえたのも、この本が英語で書かれたという事実を負うところが大きい。英語で書く人間にだけは、そういうことが見えてこない。

〔中略〕

《普遍語》にかんしての思考の欠落。

それが顕著に現れるのは、『想像の共同体』にある「聖なる言語」^(C)というもののアンダーソンの理解である。くり返すが、人類は文字を発見してから約六千年のあいだ、ほとんどの場合、自分が話す言葉ではなく、『外の言葉』——そのあたり一帯を覆う、古くからある偉大な文明の言葉で読み書きしてきた。そして、それらの、古くからある偉大な文明の言葉は、地球上のあちこちにいくつもあった。アンダーソンは、『想像の共同体』で、それらの言葉を「聖なる言語」とよぶ。

『想像の共同体』によれば、『国民国家が誕生するはるか昔、多くの人類は、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教などの「宗教的想像共同体」に属していた。人がそれらの「宗教的想像共同体」を心のうちで想像し、自分がそこに属しているという意識をもつのを可能にしたのが、それらの「宗教的想像共同体」で使われる「聖なる言語」である。具体的には、『聖書』のラテン語、『ローラン』のアラビア語、ギリシャ哲学の古典ギリシャ語、『仏典』のパーリ語やサンスクリット、おなじく『仏典』や『論語』にある漢語などである。

「聖なる言葉」をもつとも特徴づけることは何か？

それは、それらの言葉が、二重言語者が使う言葉であったという点にある。アンダーソンは言う。「ラテン語について決定的なことは、その神聖性を別とすれば、それが二つの言語を使う人々の言語だったということにある」。だが、アンダーソンのこの文章は、前にも引用した文章にすぐつながる。「生まれながらにラテン語を話す者はひじょうに少なく、ラテン語で夢を見た者はおそらくもつと少なかったろう」。アンダーソンにとって、「聖なる言語」が二重言語者が使う言葉だったという認識は、それらの言葉が、ごく少数の人間が使う言葉であったという認識にすぐつながる。しかしながら、「聖なる言語」の第一義は、それが、ごく少数の人間が使う言葉であったことにはないのである。「聖なる言語」の第一義は、何よりも、それが、異なった言葉を話す二重言語者たちのあいだでの交流を可能にする『書き言葉』だったことにある。「聖なる言語」は、無数の「口語俗語」しかない世界での『普遍語』だったのである。アンダーソンは、「聖なる言語」が『普遍語』であったことにも言及するが、それはかれにとって、中心的なことではない。

事実、「聖なる言語」が少数の人間の言葉であったことに強調を置くアンダーソンが、「聖なる言語」にかんして、くり返し使う形容詞がある。「Arcane」——日本語で「秘儀的」と訳されている形容詞である。「Arcane」は「mysterious」＝神秘的「などという言葉と同義語であり、少数の人にしかわからないという意味をもつ。具体的には、それら少数の人とは、アンダーソンによって、「文人」「エリート」「高等インテリゲンチア」などとよばれる人たちである。「聖なる言語」が「秘儀的」だということは、「聖なる言語」で書かれたものは、大多数にとっては、閉ざされた「蓋つきの大箱」にしまいこまれたもの、インターネット時代の言葉でいえば、自分たちにアクセスがないものであることを意味する。だからこそ、「聖なる言語」は、その「秘儀的性格」ゆえに、少数によって悪用されるものとなる。「聖なる言語」を読むことができる少数は、「神を頂点とする宇宙の秩序のなかで、戦略的な階層を構成」する。かれらは、読み書きを「秘儀的」なものにとどめることによって、自分の権力を守ろうとする。専断一千年にわたって、ラテン語の聖書はほかの言葉に翻訳することを禁じられていた。俗語の出版物が増え、宗教革命が広がるのを見たローマの法王庁は、「ラテン語の誓を守ろう」とし『禁書目録』を作ったりもする。「聖なる言語」は、圧制者が多数を無知のなかに閉じこめるための言葉だと糾弾されるに至るのである。

（水村美苗『日本語が「びるとき」——英語の世紀の中で』(二〇〇八年)より、なお出題の関係上改変した箇所がある。)

問一 傍線部(A)に関して、著者はアンダーソンによる分析として、グーテンベルク印刷機の発明から「出版語」の成立に至る過程において資本主義の存在が大きな役割を果たしていると説明している。どのような役割を果たしたと説明しているか、一五〇字以内で説明しなさい。

問二 著者は、言語(言葉)の社会的地位について傍線部(B)のような評価を述べている。つぎのa～dの文のうち、著者の評価と矛盾するものを二つ選び、記号で答えなさい。

- a 人々が替で使っている「口語俗語」であれば、異なる二つの「口語俗語」の間に社会的地位の高低はない。
- b 「書き言葉」は、そうでない言語(言葉)よりも社会的地位が高い。
- c 限られた数の人しか用いていない言語は、より多くの人が用いている言語よりも社会的地位が低い。
- d 神聖性のある言語は、神聖性のない言語よりも社会的地位が高い。

問三 文中の空欄①～③には、それぞれ次のア～エで示した単語のいずれかが入る。それぞれの空欄にふさわしい単語を選び、記号で答えなさい。なお、使用しない単語もある。

- ア 国民国家 イ 国民文学 ウ 普遍語 エ 国語

問四 傍線部(C)に関して、次の(1)～(2)に答えなさい。

- (1) 「聖なる言語」の本質についてのアンダーソンの理解と著者の理解の違いについて、一〇〇字程度で説明しなさい。
- (2) アンダーソンがそのような理解に至った理由について、著者はどのように考えているか。八〇字程度で説明しなさい。

II

次の文章を読んで、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

二〇一一年三月一日の大地震と津波、それによって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、日本列島に暮らす者としての生き方を考えることを求めるものでした。

その一瞬前まで誰もこんなことが起きようとは思っていませんでした。実は私はその時、東京大学構内での会議に出席していました。これまで体験したことのない揺れに外へ飛び出し、地盤が固く安全だと言われて安田講堂の前に行きました。講堂の脇にある地震研究所からも研究者が出てきて、大地震のさなかに、まさに専門家のただなかになっていることになったのです。

とは言え地震直後は何も情報がないので専門家も私たちと変わりません。地震がいつどこで起きるかという問いに対して学問ができることは、得られる精度最高のデータを用いての確率計算ですが、一方、被害に遭った人たちにとっては、地震発生は百パーセント起こってしまった出来事です。これは病気についても同じで、ゲノム(遺伝情報)や生活習慣を調べてがんや糖尿病などになる確率は出せても、ある個人がいつどの臓器のがんになるかはわかりませんし、すでに病気にかかってしまった人には、確率は役に立ちません。ここが、学問が日常と接点を持つことの難しさです。けれども、だから学問は無意味ということではなく、この違いをわかったうえで学問を生かしていかなければならないのだと、震災後さまざまな場面で強く感じました。

よく科学は難しいと言われますが、日常私たちが何気なく接している自然や人間ほど難しいものはないわけで、科学はむしろその中から考えやすい、やさしいところをとり出して扱っているとも言えます。それなのに社会の側では、科学は進歩しているのだから答を出してくれるはずと、自然や人間そのものとも言える地震や病気についての判断(とくに予測)をここに期待し、科学もまたそれに答えようとしてしまうのです。

[中略]

これからの科学と科学者のありようを考えるに際して、科学や科学技術を「自然の側から」見る必要があるというのがまず考えたことです。二〇世紀の自然科学は急速な進歩をしましたが、その成果を応用した技術の進展もみごとでした。科学や科学技術の歴史として見るとその通りなのですが、逆に自然の側に足場を移して見た時に、私たちがどれだけのことを理解したかと考えると、わからないことだらけです。地震もその一つで、それが起きるメカニズムはかなりわかってきましたが、いつ地球のどこで地震が起きるかを知ることが、今でもとても難しいことであり、それが最も身にしみているのは専門家のはずすが、専門家はわからないということがなかなか言えません。

① 震災の直後に多くの人の怒りを買ったのは、科学技術者が思わずもらした「想定外」という言葉でした。科学技術によって物づくりをする時には常に「想定」があります。たとえば、ビルを建てる時には、地震や台風などの自然災害、火事や電気系統の故障などの人工災害とさまざまな危険を想定し、それに対する安全対策をするのが当然です。実際には、計算上の危険に対して、その何倍かの事態にも耐えうるように、安全率をかけてビルをつくります。そこで、それが壊れるようなことが起きた場合には「想定外」となるわけです。ここには「人間がすべてを制御する」という科学技術、工学の発想があります。さまざまな危険を思い描いている時には、自然がすべてを解明されているわけではないことはよくわかってはいるのに、特定の数字をきめて計算をしているうちに、人間がすべてを設定できるという気分になり、その数字の中で考えるようになってしまふのです。その結果、自分は普通にフルマ^(a)っているつもりなのに、ゴウマン^(b)になるわけです。それが多くの人を怒らせたのです。

あの災害が思いがけないことであったことは確かです。けれど、自然と向き合っていると、もっと小さなことではありますが、いつも思いがけないことに出会います。今年も、もう春だと思っていたら、ある日突然雪にみまわれました。自然とはそもそも思いがけないものなのです。つまり自然に対して想定はないわけで、ここで想定外と言うことは許されません。

科学技術が自然と向き合っていない。これが東日本大震災で明らかになった問題点です。「想定外」という言葉に多くの人がどこかイヤな感じを抱いたということを大事にしたいと思えます。それは、理性では制御できない事柄が起きた時に、自分の側から考えるのではなく自然の大きさを感じとる姿勢だからです。長い間、自然の中で暮らしてきた人間として当然の姿勢で

す。「想定外」はそれを離れた言葉なのでイヤな感じがしたのです。科学者、科学技術者といえども人間なので、常にこの感覚を持ち続けなければならないのに、専門家になるとその中でしかものを考えなくなってしまうのです。

近年、研究の中で「選択と集中」という言葉が用いられるようになってからは、ますますその傾向が強くなりました。生命科学でも生きものを見るところから問いを立てるのではなく、ともかくDNAやタンパク質のどれかの物質を大量に分析する、そうすれば何かがわかるという発想で、そこに研究費が集中します。ここにはまったく、「自然と向き合う、そこから問いを立て、考えていく」という姿勢はありません。

【中略】

震災後日々伝えられる被災地の様子を見て、何かしたいという気持ちからまず具体的に行動したことは募金でした。職場、そのほかにもさまざまな仲間が積極的に活動してくれましたので、気持ちをこめて参加することができました。ありがたく思っています。けれども、より積極的に、科学者として現場へ行って何か活動できるかとなると、それはとても難しいことでした。

音楽家はチャリティコンサートを開いたり、現地へ行って音楽によって皆を元気づけたりしました。サッカー選手が学校を訪れて子どもたちと一緒にボールをケレれば、皆元氣にかけ回って楽しそうです。医師はもちろん、一人でも多くの命を救うための援助を求められましたし、建築家は仮設住宅に工夫をこらし生き生きと活躍しています。こんな時、生物学の専門家として出かけていっても誰かを元気づけられるとは思えません。技術は実用性があり、社会の要求に応じるものだけれど、基礎研究は直接社会の役に立つものではないとつくづく感じました。音楽やスポーツが同じ場所にいる人々を一つにまとめ、勇気づける力を持っているのに対して、科学にはそういう力はないということもわかりました。もちろん科学も社会の中の活動であり、文化の一つとして社会に存在するものですが、そのありようは音楽やスポーツとは違うことに改めて気づかされた体験です。科学の世界で長い間暮らし、それを意味のあることと思ひ、面白い仕事だと思ってきました。社会もその存在を認めてくれたからこそ科学とその研究者は存在してきたわけですが、震災後はこんなところで役にも立たないことをやっていたよいいだろうかとかなり落ち込みました。

時々お話をする建築家の伊東豊雄さんは『あの日からの建築』でこんなことを書いていらっしやいます。「大学で建築を学び始めた頃、……東京は世界でも有数の都市となった。だから独立して自分で設計を始めてからも、建築を考える根拠はすべて東京にあった。……／東京に私が託していたのは「新しさ」であつた。……／しかし二一世紀を迎えてからの東京は、かつてのように魅力的な存在ではなくなった。⁽¹⁾モハヤそれは未来への夢を抱かせてくれる街ではなかつた。／私が固執し続けてきた東京の建築は、見えない巨大資本の流れを可視化する装置に過ぎない。そこには夢もロマンも感じることはできない。……／未来の自然を発見したいという想いを巡らせながら被災地に向かつた時に、私は東北の地で自分の故郷に帰つてきた、と感じたのだ。……／東京が失つてしまつた豊かさが東北にはまだ残つている……／東京のような近代都市の向こう側に見えるくる未来の街の萌芽は確実にここにある」。まったく同じ気持です。そのままです。建築家はそれを見る形で示せます。科学者はどうしたらよいのでしょうか。難しいです。悩んだ結果、⁽²⁾私なりの答を見つけました。⁽³⁾

今社会では、科学は「科学技術」として「役に立つ」ことで社会とつながつているとされています。そうした状況のなかで、生命科学の基礎研究も、いつかは医療技術や医薬品の開発につながりますと言つて予算を獲得し続けているのが現状です。でも正直に言つて、私はそれをめざしているわけではありません。そうかといつてただ好きだから、面白いからやっているのではないことは確かです。もう少し基本的な問いがあります。しかし、自戒をこめて言うのですが、これまで科学者の側からも、科学と科学技術にまつわるこうした現状を、本質的に問うことをしてきませんでした。

今回の原発事故でも明らかになつたように、現代社会での科学技術のありようには大きな問題があります。事故について語る科学者や技術者に対して多くの人が不信感を示し、それは目を追つて強くなつていきました。科学・科学技術・科学者・技術者とは何なのだろうということをしていねいに考えず、乱暴に社会の役に立つ(しかもそれはお金につながる)という言葉です。まててきたのは間違つていたことがはつきりしました。二年がたち、原発反対運動が大きくなつていっていますが、それは今の社会のありようへの問いだと思います。

ここで、科学の中にいる者としては、ある一つの技術に反対を唱えるか否かでなく、この問いが生まれたところを深しにい

かなければなりません。そして、科学が生まれ、そこから開発された科学技術によって進歩を続けてきた近代を問い直さなければなりません。それが、私がいま科学者としてやるべきこととして見つけた答です。この問い直して最も大事なのは、科学者、科学技術者が特別な人ではなく、人間であること、自然の中にあることをいつも考えるようにすることです。

(中村桂子『科学者が人間であること』(二〇一三年)より。なお出題の関係上改変した箇所がある。)

問一 傍線部(a)~(d)のカタカナを漢字に直しなさい。

(a) フルマ

(b) ゴウマン

(c) ケ

(d) モハヤ

問二 傍線部①について、震災の直後に科学技術者がもたらした「想定外」という言葉が多くの人々の怒りを買ったのはなぜか。

一五〇字程度で説明しなさい。

問三 傍線部②「東京が失ってしまった豊かさ」とは何を意味しているのか。五〇字程度で説明しなさい。

問四 傍線部③の「私なりの答」とは何か。一〇〇字以内で説明しなさい。

III

次の文章は、『増鏡』の一節で、後宇多法皇の病が重篤になったことが述べられた後に続く場面です。これを読み、後の問い(問一〜問五)に答えなさい。

そののち御孫の春宮行啓あり。世をしろしめさむ時の御心づかひなど、いま少し細やかに聞こえしらせ給ふ。宮は、先帝(注2)の御かほりにも、いかで心の限りつかうまつらんと、あまし思われつるに、あかず口惜しうて、いたうしほたれさせ給ふ。

御門の御仲らひ、うはべはいとよけれど、まめやかならぬを、いと心苦しと思さるれど、言に出で給ふべきならねば、ただ大方につけて、世にあるべきことども、又この頃少し世に恨みあるやうなる人々の、わが御心にはあはれと思さるるなどあまたあるをぞ、御心のままなる世にもなりなん時は、かならず御用意あるべく聞こえ給ひける。中御門の大納言経繼、六条の中納言有忠、右衛門督教定、左衛門佐俊頼など聞こえし人々の事にやありけん。

その夜はとまり給へるもしろしめさで、夜うちふけて、少しおどろかせ給ひて、「春宮はいつ歸り給ひぬるぞ」とのたまふに、うち声づくりて近く参り給へれば、「いまだおはしませしけるな」とて、いとらうたしと思されたる御気色あはれなり。大方の気色、院の内のかいしめりたるありさまなど、よろづ思しめぐらすに、いとかなしきこと多かれば、宮うち泣き給ひぬ。

心細ういみじとのみ思さるるに、正中元年六月二十五日、つひに隠れさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。

御門また御服たてまつる。あけくれねんごろに孝し奉り給ふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮と聞こえし、今は達智門院と申すも、まいてひと所をのみ頼み聞こえさせ給へるに、心細ういみじと思し嘆くこと限りなし。昔の内侍のかんの殿、院号ありて万秋門院と聞こゆるも、この院の御かけにてのみ過ぐし給へれば、より所なくあはれげなり。

御四十九日は八月十日余りの程なれば、世の気色なにとなくあはれ多かるに、女院、宮たちの御心の中ども、朝霧よりも暗れ聞なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の位の御時に、宰相典侍とて侍ひしは、雅有の宰相の女なり。その世の古き友なれば、同じ心ならんと思しやるもむつましくて、万秋門院のたまひつかはす。

(A) 仰ぎ見し月もかくるる秋なればことわりしれとくもる空かな

いとあはれに悲しと見奉りて、御返し、宰相典侍、

(B) 光なき世はことわりの秋の月涙そへてやなほくもるらん

(注1) 春宮 後二条天皇の皇子・邦良親王。

(注2) 先帝 邦良親王の父・後二条天皇。

(注3) 御門 当時の天皇である後醍醐天皇のこと、邦良親王の叔父にあたる。

(注4) 服 喪服のこと。

(注5) 孝じ(孝す) 亡き親の供養をすること。

問一 傍線部(a)(b)(c)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(ア)はどのようなことを述べているのか、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(イ)について、主語(動作主)を補って現代語訳しなさい。

問四 傍線部(ウ)について、「同じ心」の具体的な内容を補って現代語訳しなさい。

問五 和歌(A)(B)について、比喻表現を踏まえて現代語訳しなさい。